



日 口 交 流

発行: 特定非営利活動法人日口交流協会

E-mail:nichiro@nichiro.org

Home Page: <http://www.nichiro.org>

〒106-0041東京都港区麻布台3-4-14

麻布台マンション401号

Tel : 03 (5563) 0626 Fax: 03 (5563) 0752



坂本里沙子さんのピアノリサイタル・トーク会に参加して

木村 冬馬

盛夏を過ぎた頃、益田元一常任理事からご連絡を頂いた。コロナ禍で長らく協会の活動を中断していたが、久しぶりにイベントを実施する運びとなった。と。モスクワ音楽院を卒業されたばかりの坂本里沙子さんによるピアノの生演奏を聴けるとのことで、就職活動を終えたばかりの荒みきった心を癒すには渡りに船、と参加を申し込んだ。プログラムには「ピアノリサイタルと講演」とあり、リサイタルと講演のどちらか一方にしか参加したことのない身では内容についての想像がつかず、好奇心も手伝っての参加となった。

いざ会場に行ってみると大勢の人が詰めかけていて、早めに申し込んでおいて正解だったことを悟った。会場のタカギクラヴィアは雰囲気のある空間で、部屋の最も奥に設置されたグランドピアノが渋谷の賑やかさと対照をなしているように感じられた。

時間になると坂本さんが華やかなドレス姿で登場し、自己紹介が始まった。桐朋女子高校の音楽科に在籍していた際にモスクワを訪れ、伝統や芸術に重きを置く文化を目の当たりにしたこと。ロシア語が全く分からない18歳時にモスクワ音楽院への入学を決めたこと。気さくな語り口ながら堂に入っていて、私を含めた会場全体が傾聴しているのを感じた。



トークはその後、音楽院の伝統的な教育スタイルについての話題へと移っていった。モスクワ音楽院には4つの流派があり、『ハリー・ポッター』シリーズのようにそれぞれ監督する先生がいること。坂本さんの場合はセルゲイ・クドリャコフ先生に師事していて、クドリャコフ先生の学生時代に所属流派を率いていたのがミハイル・ヴォスクレセンスキー先生だった。更に系譜を上を辿っていくとリスト・フェレンツまで辿れる、そんなロマン溢れる歴史があるのだと。

また実技試験の様子も興味深かった。静謐な空間に楽器の音だけが響くのではなく、採点する先生同士が演奏中でも和気藹々と談話していること。声楽とのアンサンブルでは、ピアノ演奏を声楽家に調和させる技術が試されること。

スライドを用いたトークの要所々々には、チャイコフスキー『ドゥムカ』などピアノ小品の演奏が挟まり、6年半のロシア留学で洗練された美しい音色を堪能することができた。それぞれの曲がロシアの異なる一面を切り取ったような調べで、トーク内容と相俟ったリサイタルであることを感じた。プログラムの「ピアノリサイタルと講演」という表現が腑に落ちたひとときだった。(東京大学医学部医学科6年)

お知らせ

●ロシア語クラス生徒募集中!

水曜 初級2 (17:15~18:15) 初級1A-1 (19:25~20:25)

初級1A-2 (20:30~21:30)

金曜 入門 (18:30~19:30) 初級1B (19:30~21:00)

土曜 上級 (10:00~11:30)

オンラインクラスは初級、中級1、中級2、準中級のグループレッスンが4クラスあります。

*事務所では少人数で実施し、消毒液、パーテーション等用意して十分配慮はしておりますが、受講の皆様はマスクの着用、換気、手洗い等、感染の予防にご協力お願いいたします。

対面クラス、オンラインクラスともプライベートレッスンも実施しておりますので、ご希望の方はご相談ください。ベテラン教師陣が皆様をお迎えいたします。

コルド・ナターリア (初~中級)、イローナ・パルフェノワ (中~上級)、タチヤナ・スニトコ (初~上級)、ウラジーミル・ポロビエフ (初~中級)、オクサーナ・ピスクノワ

●2021年度の年会費は、1月始めに請求させていただきますので、会員の皆様はどうぞよろしくお願いいたします。

●ペーターベン生誕250周年記念イベント

日時: 2020年12月10日 (木) 18:30~21:40

会場: 池袋ハルザ 8階

会費: 2000円 (学生1000円) コンサートと映画

お願い

NPO 日口交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシア関連の学習会、ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を続けています。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をお願い申し上げます。一口千円からいくらでも結構です。

児玉晋氏、朝妻幸雄氏にご協力いただきました。ありがとうございます。

振込先: 郵便口座 00160-9-66486、加入者: 日口交流協会

連絡先: 日口交流協会事務局 E-Mail:nichiro@nichiro.org

Tel:03-5563-0626 Fax:03-5563-0752



アクーニンゆかりの横浜散策に参加して

中村 泰弘

アクーニンはロシアの作家で、在日ロシア大使館に勤務経験があり数々の日本文学をロシア語に翻訳した程の日本通でもある。日本語の「悪人」をもじって自らのペンネームにしたという一風変わった小説家だ。推理小説を主に手がけ、中でもファンダーリンの捜査ファイルシリーズはロシアで高い評判を受けており、日本でも翻訳が出版されている。超人的な能力を持つ若き青年官吏が、派遣された赴任地で犯罪や陰謀に立ち向かいながら難事件を解決していくというストーリーを軸に、舞台となっている帝政期ロシアや、当時の警察・マフィアといった裏社会が細かく描写されており、そのピカレスクな空気に読み手の好奇心がかき立てられる。また、ロシア語の叙述が豊かで文学的にもすぐれたものとして評価する人も多く、当協会のロシア語クラスで購読テキストに使われることもある。

今回、ファンダーリン・シリーズの横浜を舞台にしたエピソードに出てくる史跡を訪ねるというツアーを、アクーニンと一緒に仕事をしたこともあるオクサーナ先生が企画してくれた。昼過ぎに桜木町駅前に集合し、古地図を手に汽車道から象の鼻を過ぎて岸壁沿いに歩き、ブラフと呼ばれる山手を散策した。参加者は、協会会員や最近ロシア語の勉強を始めた人、横浜在住のロシア通なども来てくれて、先生を入れ7名での実施となった。

主人公のファンダーリンが小説の中で横浜の領事館に赴任したころの日本は明治維新の直後で、日本で初めて開通した鉄道の終点である横浜駅が今の桜木町駅の場所にあり、漁



村を開いて建設された横浜港の周りにすべての外国の大使館や公館、貿易関係の会社などが集められ、外国人は、山手地区を専用居住地とし野毛山の向こうに住む日本人とは隔離されていた。そんな当時の横浜に外交官としてやって来た主人公は、在住のロシア人や、日本の政府や裏社会の様々な人たちと関わりを持つようになる。そんな話を外国人にもかかわらずしかも現代にいながら編むことができた作家の力に改めて驚かされた。

道すがらオクサーナ先生が、来日したアクーニンにアテンドしたときの面白い話を語ってくれた。ファンダーリン全集の各巻の発行順は必ずしも物語の時系列順になっていないため、先生が著者に「あなたの作品は最後まで読みました」と最新巻の名前を挙げて賛辞を送ったところ「その本は最後じゃないよ」と返されて会話が噛み合わなかったとか、アクーニンを連れてファンダーリンの足跡をたどるというテレビの企画では、撮影場所候補の打合せで先生がキリスト教会を提案したところ、正教会ではなくカトリック教会なので一蹴されたとか、過去の失敗談を懐かしそうに語っていた。

山手のローズガーデンそばの洋館でアフタヌーンティーをした後、件の教会やテニス発祥の地を訪ねて、歴史への想いをはせながら異国情緒を存分に堪能した。長引くコロナ禍のせいで遠方への外出ははばかれる日が続いているので、久しぶりのミニ旅行企画は参加者たちにとって大変ありがたいものだったと思う。

(常任理事)

～イルクーツク便り(9)～

留学生活7年を迎えて・5

阿部 耕大

皆さんこんにちは。イルクーツク国立大学修士課程2年の阿部耕大です。コロナウィルス第二波到来の真っ只中のロシアですがイルクーツク州内では11月前後から連日200人以上の感染者が確認されています。

そんな中、今月初旬からついに市内のほぼ全ての大学で授業が完全オンライン化、実験や特別なコンピューターを使う場合のみ教室での授業という形になりました。大学でも感染拡大対策として布マスクを無料配布(2回目サイズが1・5倍…対策強化?笑)したり、入口で体温測ったり(計測してない時もフツーにあった)して努力はしていたのでしょう。とはいえカフェも映画館も通常営業しているので一見するといつものイルクーツクの光景と同じ…ではもちろんありません。なぜなら市民がきちんとマスクをしているから!春や夏なんて車内でマスク着用してる人なんて10人中1人もいないくらいだったのに、今やマスク装着が完全に義務づけられ、しないと乗せてもらえません。車内で咳でもしようものなら罵詈雑言が飛んでくることも…睨みつけるとかじゃなく、すぐ文句言うあたりは国民性だの一つ、て妙に納得したり、あんたもそんな大声で怒鳴ったら唾が飛ぶかもしれないから感染対策的によくないのでは?と思ったり(笑)

今後も感染が拡大した場合は商業施設閉鎖もあり得るかもしれませんが、部屋で一日中過ごすことはなく、短いロシアの秋を楽しみたくて外出していました。とはいえ今やバイカル湖に行くことすら大学から控えるように通告されているので市内に留まるし

かありません。なので午前中の誰もいない時間を狙って映画館へ行ったり(なぜか《シャイニング》と《となりのトトロ》が再上映してた)、ひげ脱毛サロンへ通ったり(あまりの痛さに10回は泣いた)して日々を過ごしていました。でも今思えば移動は必要最低限にするべきだったのかもしれない…。

というのも10月の最終週になぜか突然味覚と嗅覚が消失したからです。そして歩行が少し辛いと感じる程の筋肉痛。まさか…?と思ったのですが高熱や鼻水の症状は無かったので痛みに耐えつつ大学へ通ってました。その頃はまだ教室授業だったので…。検査を受けに行こうかと迷いましたが、連日早朝から人々が長蛇の列を作っており(正直病院の方が感染する危険性高そう)、救急車を呼ぼうにも大学の恩師(旦那が医者)から、「呼んでも来るのは明日よー」と言われたらもう為す術もなく、薬を飲んで自宅療養するしかありませんでした。現在は体調が回復したのですが、コロナに感染していた可能性が高いと思います。あの酸っぱいロシアの粉菓《Т е р а ф л ю》の味すらしなかった時は正直心配しました…。

なので反省の意を込めて、最近基本的には寮の部屋で過ごしています(笑)。ラーグりでの一夏の男女の生活を描いたロシア発のビジュアルノベル《Бесконечное лето》を再プレイ中。シナリオもさることながら音楽が素晴らしい。自宅でロシアの現代サブカルチャー堪能する日々です。

ノヴォチェルカースク

畔上 明

月々の「日口交流」紙と共に、ロシアに関する情報を細大漏らさず伝えてくれる「ロシアンティ」による映画、音楽、新刊本の案内を毎月楽しみにしておる一愛読者ですが、先月号の映画上映ニュースで「親愛なる同志たちへ」(今年9月黒沢清「スパイの妻」が銀獅子賞を受賞したことで注目されたヴェネチア映画祭で審査員特別賞を受賞したのがこのロシアの映画)をいち早く観ることが出来るを知るや否や、11月1日の晩、東京国際映画祭の会場六本木へと勇んで出かけたのでした。

半世紀ほど前に日本でも上映された「貴族の巢」や「ワーニャ伯父さん」の監督アンドレイ・コンチャロフスキーは、「機械じかけのピアノのための未完成の戯曲」や「太陽に灼かれて」のニキータ・ミハルコフ監督の8歳上の兄であり、アンドレイ・タルコフスキーの「僕の村は戦場だった」や「アンドレイ・ルブリョフ」の共同脚本を書いたということで馴染みの方もいらっしゃることでしょう。また、黒澤明原作の「暴走機関車」を1985年にアメリカで監督したことも話題となったコンチャロフスキーは現在83歳、その最新映画「親愛なる同志たちへ」では、ソ連時代に雪どけ政策を推進していたと思われていたフルシチョフ政権下1962年にノヴォチェルカースクで起きたデモ騒動を描いています。

ノヴォチェルカースクは、モスクワから1000キロほど南下した地、ドン川の畔りのコサック軍の首都チェルカースクが洪水に悩まされていたことから北20数キロの丘に1805年に移転した町で、東ウクライナの親ロシア派で知られるドネツクへは西に250キロ、独ソ戦の激戦地スターリングラード(現ヴォルゴグラード)へは東に440キロ、かつてロシア革命後の国内戦ではコサック兵と結びついた白軍の拠点、第

二次世界大戦中はドイツ軍の占領下にあったという複雑な歴史があります。

食料不足、物価高騰に対して賃金が下げられ、抗議する労働者が立上った電気機関車工場のストライキに端を発し5000人規模のデモに膨れ上がったのですが地区委員会が治め切れずに、警察、KGB、軍の戦車や兵士が出動、24名の死者、70名の負傷者が出たことも、そしてまた大半は元コサックの政治犯が起こしたとされた暴動についても、四半世紀後のペレストロイカまでは秘密裏にされていたそんな事件がモノクロ映像で当時の生活状況をも彷彿とさせつつ衝撃的な映画となったのでした。

監督の妻ユリヤ・ヴィソツカヤはノヴォチェルカースク出身でもあり、この映画の市共産党委員会幹部の役を演じており、監督の父セルゲイ・ミハルコフが作詞、ドナエフスキー作曲の「春の行進曲」が彼女によって歌われるのも印象的です。

なお、現在公開中のドキュメンタリー映画「国葬」は、1953年のスターリンの葬儀の様子が近年発掘された30時間に及ぶソ連邦中の200人のカメラマンによる白黒、カラーの様々なアーカイブを2時間14分にセルゲイ・ロズニツァ監督がまとめ上げた作品で、こちらも「ロシアンティ」情報で観る機会を得ました。コンチャロフスキーがソ連崩壊となる1991年に発表した映画「映写技師は見ていた インナーサークル」はスターリン時代を描いたドラマで、スターリン国葬のシーンで終わるのですが、そこでは押し寄せる群衆によって数千人もの圧死者が出たことが表現されていたことも思い出されたのでした。(「プロコ・エアサービス」シニア・アドバイザー)

パステルナークは野菜です

大原 翔

ロシアになっていつ頃からだったろうか、モスクワの高級スーパーマーケットに行けば、大根を買うことができるようになったのは、日本の大根より小振りだが、味はほとんど変わらない。嬉しいことに商品名は日本語のダイコン(дайкон)とロシア文字で表記されている。青果物コーナーの大根の横あたりに、大根に似た白っぽいニンジンというような形をしたものが並んでいることが多い。見慣れない野菜で、この商品名をみるとパステルナークと書いてある。

ロシアに関心を持っている方で、ある一定年齢以上の人にとっては、パステルナークというと、反射的に思い出すロシアの文学作品がある。当時、出版が禁止されていた「ドクトル・ジバゴ」の著者ボリス・パステルナークである。1917年の10月社会主義革命を否定的に描いたこの作品「ドクトル・ジバゴ」がイタリアで出版され、翌1958年にはノーベル文学賞受賞となった。しかし、東西冷戦の政治的な嵐のなかで、著者は受賞辞退に追い込まれる。のちのペレストロイカ時代になり、著者の名誉回復がなされ、同作品も1988年になりやっと、本国ソ連で出版された。

私は、小説「ドクトル・ジバゴ」はいまだに読んでいないのだが、この小説を原作につくられた映画(1955年、米国・イタリア)は見ている。映画の挿入歌の有名な「ララのテーマ」のメロディーが心に残っている。1980年代の後半に私は、モスクワに居たのだが、レストラン等で「ララのテーマ」を時々耳にした。当時発禁本を原作とした映画音楽が街で流れていたことに、映画だ



から規制がゆるいのかなどその頃、勝手に想像していた。いま振り返ると、当時、ボリス・パステルナークの名誉回復も進みつつあり、当局よりすでに許可が出ていたのかもしれないと思う。ペレストロイカの真ただ中「ぼうーっと生きていた」自分を反省しなければならぬ。

ロシアの店で、初めて大根の傍らに並んでいるパステルナークという野菜を目にしたとき、その名前は、作家ボリス・パステルナークにちなんでいるのかと想像していた。残念ながら、まったく無関係のようである。研究社露和辞典を見ると、パステルナークの項に「アメリカカボウフウ(ニンジンに似たセリ科の栽培植物、多肉の根は食用・飼料用)」との説明がされている。なんのこともやら全くわからないが。

ボリス・パステルナークの「ドクトル・ジバゴ」を思い出させてくれたのは、ラーラ・プレスコットという米国の作家が史実をもとに書いた「あの本は読まれているか」(吉澤康子訳、東京創元社、2020年出版)を最近読んだからであった。あくまでフィクションとして書かれているが、公開された公文書などの資料をふんだんに利用しているとのことである。スリル満点の面白い作品で、コロナ禍のなかで、時間をわすれてしまった。「あの本は読まれているか」のあの本は、言うまでもなく「ドクトル・ジバゴ」である。日本語の新訳も最近だされているが、日露とも最近では、その読者は少ないのではなからうか。今となつては、あの本はあまり読まれていないのだろう。あの本を知らない世代のひとも増えてきていることであろう。あの野菜のパステルナークの食べ方について、ご存知の方がおられればご教示願えれば幸いである。

コロナ第二波とロシア

西山 美久

ロシアでは9月中旬頃からコロナの新規感染者数が徐々に増えており、感染ペースは5月のピーク時を上回っている。10月中旬にはロシアの累計感染者数は世界第4位を記録し、欧州同様に第二波が拡大している。感染者が急増するフランスとドイツはロックダウン(都市封鎖)の再導入を発表したが、プーチン大統領は経済への影響を考慮してロシア全土での再導入は検討していないようである。

第二波で感染者が徐々に増える中、モスクワ市内ではスーパーやショッピングモールの他、市民の主要な移動手段である地下鉄の各駅でもマスクや手袋のチェックが行われており、それも5月のピーク時に比べてかなり厳しくなっている印象がある。地下鉄のホームには複数の警察官も配置されている。また、コロナ禍でもアイスホッケーやバスケットといったスポーツの試合は行われているが、「3密」を防ぐために入場制限が実施され人影はまばらである。それでも熱狂的な地元ファンが会場に駆けつけ、試合を盛り上げているようである。

11月8日にはロシア全土で2万1798人、モスクワ市では過去最多となる6897人の新規感染者が確認された。これを受けソビヤニン市長は、11月13日から2021年1月15日までの2ヶ月間、市内各大学(市立大学等)での授業をオンラインに切り替えるよう指示を出した他、レストランやカフェ、さらにはバーやナイトクラブ等の営業を2時から翌朝6時まで禁止に

し、違反者には罰金も課す方針である。この判断に続き、モスクワ大学やモスクワ国際関係大学(ロシア外務省付属)でも独自の決定がなされ、全ての授業がオンラインで実施されることになった他、未だ収束の兆しが見えないことから当該措置は無期限とされた。

また、コロナ対策として独自の取組みを導入する飲食店もある。各種報道によると、例えば市内のマクドナルドや一部のカフェでは、来店前に自身の携帯電話番号を特別サイトに登録して初めて入店できるようにしており、感染者が店内にいたことが後日、判明すると、コロナウイルス検査を促すショートメッセージが携帯に届く仕組みになっているという。

さて、毎年モスクワでは年末年始の休暇が近くなると、主要な広場には大きなツリーが置かれ、市内は色鮮やかなイルミネーションで飾られる。赤の広場やトヴェルスカヤ通り等では様々なイベントが開催される他、クリスマスマーケットもあり大勢の人で賑わう。このマーケットではマトリョーシカやグジェリ等の民芸品を扱う屋台以外にも、シャシュリクやホットワイン等を扱う屋台が軒を連ねている。残念だが、今年はコロナの影響でそれらが中止になると聞いており、外をブラブラすることもなさそうだ。新型コロナウイルスの収束を願ってやまない。

(北海道大学)

ロシア人から学ぶロシア語教育史in函館

倉田 有佳

毎年11月、「キャンパス・コンソーシアム函館」(函館市内の8高等教育機関で構成)が主催する合同研究発表会「アカデミック・リンク」が開催される。今年は新型コロナウイルスの影響でWeb開催となった。

筆者は、チーム名「ロシア語教育を振り返ろう会」、タイトル「ロシア人から学ぶロシア語教育史in函館」でエントリーした本校1年生8名と、幕末開港期から現在までをスライド(16枚)にまとめることになった。

函館で最初にロシア語を日本人に教えたロシア人は、初代駐日ロシア領事館の館員たちである。領事館附属聖堂の読経者イワン・マホフは、子どものためのロシア語入門書『ろしやのいろは』を作成し、本格的なロシア語教授は、二代目司祭として函館に着任した若きニコライが始めた。

時代は明治へと移る。樺太の境界問題は未解決のままだったため、ロシア語に通じた官吏の育成は急務とされた。北海道開拓次官黒田清隆の考えで、ロシア領事館の置かれている函館にロシア語を教える官立学校が開設された。教師に推挙されたニコライは東京に拠点を移し、日本人のみでのスタートとなった。そこに領事館附属聖堂読経者だったサルトフ(? - 1874年函館)が招へいされ、不振だった学校は勢いを取り戻す。だが、そのわずか半年後、サルトフは脳溢血で亡くなった。

20世紀前半の函館は、露領・北洋漁業の基地だった。ロシア語の需要は高く、教師として活躍したのは亡命ロシア人たちだった。こ

のうち学生が取り上げたのは次の4名である。新聞広告を出し、自宅でロシア語を教えたウラジーミル・サファイロフ(1866年?カザン - 1960年函館)、漁場通訳を中心に結成された北洋同志会のロシア語教師ワシーリ・アルハンゲリスキー(1887年アルハンゲリスク - 1939年函館)とアナトーリ・カラリョフ。庁立函館商業学校、戦後は北大水産学部や市民講座で講師を務めた成田ナデージダ(1903年ニコラエフスク - 1984年函館。旧姓サンプルスカヤ)。アルハンゲリスキー以外は日本人と結婚し、日本国籍を取得した。当時の資料を読んだ学生は、カラリョフさんが「試行錯誤を続けながらより良い教授法を模索していた」ことを感じ取った。

そして「現在」。ここでは、本校のロシア人教師7名中、1年生のロシア語文法・会話・講読を担当する3名を取り上げた。「女はオイ(-о й)、男はオム(-о м)。言い回しが独特のリズム。文法規則が頭に刷り込まれる」。「オリジナル教科書で難しいロシア語文法を一つ一つゆっくり解説。

日々ロシア語が身につけてきたと実感」。1カ月半の間で1世紀半の歴史を振り返った学生たちは、「昔と今の語学学習環境の違いについて認識した」。「今こうして生きたロシア語を学ぶことができている私たちは、一体どれほど幸福な存在なのかということを知ることができた」、などの言葉で発表をまとめた。

(ロシア極東連邦総合大学函館校教授)



成田ナデージダさんの授業風景
(1962年) (函館市中央図書館蔵)